



傾聴の基本～「聞く」と「聴く」の違い～

教師は、一般的に話が上手な人が多いです。授業を参観すると、授業中、ずっと話をされている教師もいます。でも主役は子ども達。従来型の一斉授業から転換を図れない教師の特徴を「Talkトーク（おしゃべり）」「Chalkチョーク（チョークと黒板）」「Jokeジョーク（冗談）」で成立していると、述べた方がおりましたが、今、私たちが求められているのは、「主体的・対話的で深い学びの実現を通して子どもの生きる力を育てる授業」です。そのためには、子どもの話を「聴く」力を身に付けなければなりません。

話を聞くことは、小さい頃からやっている行為なので、難しくないと思っている人も多いと思いますが、聴く（傾聴）ということになると、高度な能力が必要になってきます。

雪が降った朝に登校してきた子どもが、先生に向かって、「先生！雪が降ったよ！」と話しかけた。先生は「あ、そうだね。」とだけ答えた。会話とすればこれでよいのですが、傾聴とは、子どもの考えや気持ちを、できるだけ相手の身になって、ひしひしと、ありありと想像しながら一緒に寄り添うことです。子どもは、先生に対して事実だけではなく、気持ちを伝えたいのです。もし、雪が降ったことが楽しく思っている子どもだったら「休み時間の雪合戦が楽しみだね！」となるでしょうし、朝、雪の中を苦勞しながら登校した子どもだったら、「雪道、大変だったね。転ばなかった？」となるかもしれません。相手の気持ちを分かち合ってこそ、教師と子どもの中の距離が短くなり、信頼関係が深まるのです。

これは、保護者との関係にも当てはまります。やはり、丁寧に相手の話を聴くことが大切です。



アドバイザー訪問が終了しました

2月となり、各学校で実施されていたアドバイザー訪問もほぼ終了しました。今年度は、村瀬公胤様、永島孝嗣様、浅井幸子様、谷井茂久様、森田智幸様、金田裕子様の6人のアドバイザーが訪問し、各学校でお話しさせていただきました。6名のアドバイザーの皆様、誠にありがとうございました。また、アドバイザー訪問以外にも、各学校で校内授業研究会を実施されており、先生方の熱心に子どもの学びを見取る様子を拝見し、心打たれました。今まで実践してきた主体的・対話的で深い学びのある授業づくりを今後も継続し、学校全体で子ども達のために力を注いでいただければと願っております。

なお、以下の予定で第3回授業づくり研修会を実施いたします。

○日時 令和7年2月21日（金）13：30～16：30

○会場及び授業者 須賀川市立義務教育学校 稲田学園

面川恵子教諭（2年 算数 単元名「はこの形をしらべよう」）

○講師 学習院大学教授 秋田 喜代美 様



「ブルタバ(モルダウ)」のハープが聴こえますか? 《コラム No.18》

数年前、学びの共同体全国大会で報告された、愛知県小牧市のある中学校の音楽鑑賞の授業。スメタナ「我が祖国」第2曲『ブルタバ』のはじめを聴いて、どんな楽器が聴こえるか生徒たちが話し合います。多くの楽器が挙げられた後、教師が、誰も聴いていない楽器があるのだけれど聴こえるかなと言って、もう一度再生します。眼を輝かせて聴き入る生徒たち。(耳を輝かせて(?))

やがて「ハープ?」というつぶやきが聞こえます。「ハープ!」「ハープだ!!」

ニコツとした教師がもう一度再生します。はっきりと確かにハープが聴こえます。ブルタバの流れに添うような、あるいはそれを見守るようなハープの音色・・・生徒たちが言い現します。

今まで聴こえなかった音が聴こえる。それは素晴らしい出会いの瞬間であり、まさに音楽にふれ、対話することでしょう。見えなかったものが見える、わからなかったことがわかる、学びの場には奇跡のように素晴らしい瞬間があります。

神奈川県茅ヶ崎市の小学校の月例校内研。授業者の教師が、研究会の前に、ビデオを何度も見返しました。ある時、今までは聴こえず、あると思わなかった子どもの発言に気づき、何度も聞くうちにハッキリと聴こえるようになったそうです。最初はノイズか、沈黙のシーンという音としか思わなかったものが、ハッキリと発言として聴こえる! この子がここでこんな発言をしていた! やがて、その子の授業中の表情の奥にある気持ちまで、はっきり観えて思い返せるような、そんな気がしたそうです。

学ぶことは、わからないことから始まります。しかし多くの子どもたちは「わからない」ことを発言できません。恥ずかしい・・・「わからないんだ」と思われる・・・自分のために先生やみんなの時間を取っちゃいけない、先生が「わからないって言っていいんだよ。大切なことだから話してね」と言ってくれても話せません。それどころか、そんな顔さえできません。顔を作っています。教師が外側だけさっと見ていたら、その子の内側の姿を観とることは難しいでしょう。

もとより授業を進めながら子どもの姿を観ることは、不可能に近い至難です。だからこそ、校内研で子どもたちの学びの姿を他の同僚教師たちが見て、ともに語り合い学び合うことが大切です。それをくり返すうちに、見えな表情が観え、聞こえない声が聴こえるようになります。聴こうとする耳にのみ聴こえ、観ようとする眼にだけ観えるものがあります。それを語り合い、ていねいに聴き合い、より深く聴こうとする教師たちは、眼と耳を深く確かにすることができず。そしてその語りの言葉を共有する教師たちが、同僚性を育み、ともに学び合い支え合う学校を創り、働き方改革を進めることができると言えるでしょう。

あなたの耳に、ブルタバのハープは聴こえていますか?

須賀川市立第一小学校の授業研究会から

2月10日(月)、須賀川市立第一小学校で校内授業研究が実施されました。今回の授業研究会には講師に「東海国語教育を学ぶ会」の石井順二様が来校されるということで、県外からの参観者もあり、多くの先生方が参観されていました。

全体授業は4校時に2年の国語の授業、5校時に3年の国語の授業が行われ、子ども達が真剣に学んでいる姿が見られました。二つの授業とも、音読を中心に、物語を読み描くという、すばらしい授業でした。

全体授業① 2年国語科 読んでかんじたことをつたえ合う「スーホの白い馬」

授業者 藤田 暁美 教諭

全体授業② 3年国語科 登場人物について考えたことをつたえ合う「もちもちの木」

授業者 横田 亜紀 教諭

石井先生のお話の中で印象に残ったのは、「物語は、解釈すること、つまり読み取ることでいい。物語は読み描くことが大切。子どもたちは、心に描くことで感動するのです。」とお話されたことです。物語の授業では、よく意味を考えさせたり、「なぜ?」「どうして?」と聞いたりします。そうではなく、子ども達が、その物語の様子を心の中に描き、物語の世界に浸ることがとても大切なのですね。学びの多い授業研究会でした。ありがとうございました。



石井順二氏 1943年生まれ。三重県で国語教育も実践に取り組み、小中学校の校長を務め、「『学び合い』を生きる」など多くの著書がある。